

# 教宣 せぶん

## シーン 毒を食らわば皿まで

「結果として、RA制度が廃止され、実際に850名のRA社員がやめていったわけですが、この事実をどう受け止めていますか?」。この日行われた脇山証人に対する反対尋問でのこの質問は、私たちだけではなく、多くの元契約係社員が聞きたかった質問だったはずです。

この質問に対し、脇山証人は「制度が廃止されたことは遺憾に思っている」とだけ短く、不機嫌そうに答えました。「大きな組合のなかにいた方が安全だ」「安全だからこの道を全員ですすもう」と組織をリードし、組合員の「生活と雇用を守る」ために全損保からの脱退を決定した指導者は、その決定から2年も経たないうちに制度廃止を通知され、経営が思い描くシナリオ通りの道を歩まされたという事実を突きつけられ、ふてくされてそう答えるしかなかったのでしょうか。組合員の「生活と雇用」を託されていた者としての「責任感」や「まじめさ」は、そのふてくされた態度からはまったく感じられませんでした。

この日の尋問は、もちろん脇山証人が提出した陳述書に基づいて行なわれたわけですが、その陳述書には「会社から出されたRA制度に対する提案・通知の問題にしても、こうした原告としての言動、原告所属組合員の職場での立ち居・振るまいが、少なからず影響したのではないかとすら思っている」と記されています。あたかも、この制度廃止は、「自分の意思に従わず全損保に残った組合員のせいだ」という主張です。当時の自らの「立場」や「責任の重さ」を放棄し、顧みず、その責任を自らの意に沿わなかったものに押し付ける非常に狡猾な主張だと思えます。そして制度廃止を通知した経営も全然悪くなく、生活と雇用を守るために全損保からの組織脱退を決めた自らの判断も誤ってはならず、悪いのは全損保であり、自分の意思に従わなかった者たちだと言わんばかりの主張です。まるで旧東海社の経営者のようです。

今回の財産問題にしても、本来経営者と働くものの間になければならない太い一線を、脇山証人は自分たちと経営者の間に引かず、私たちとの間に引こうとしているから起きている、というのが本質・全体像だと思います。線を引く場所を明かに間違えているから起きている問題です。以前にも紹介しましたが、東海社との企業合併が発表され、これから組織問題も予想されるという際の支部定期大会で、当時の加藤全損保委員長が来賓として来られ「どんな状況になっても敵が誰かを見誤らないように」と訴えた言葉は、脇山証人の胸にはまったく残っていないようです。自らも全損保組合員の一員として、純粹に朝日闘争を支援し、純粹に他支部の本社前で腕章をつけて抗議行動をした経験もきれいさっぱり忘れ去ってしまったようです。労働組合同

士、その考え方や方針に違いはあって当然です。そこには線が引かれます。しかし、お互いに、一番太い線は働くものと会社の間で引くというのが、労働組合を名乗る以上、大原則だと思います。脇山証人の陳述書やこの日の証言を聞いていると、この大原則をトウの昔に捨て去ってしまっていると感じました。「毒を食らわば皿まで」という諺が浮かんできました。